

Chronic cough up-to date 2008

基礎からのレビュー

亀井淳三 星薬科大学薬物治療学教室

慢性咳嗽に関する関心が高まっているにもかかわらず、有用な鎮咳薬は少ない。病態に応じて、より選択的に咳嗽反射を抑制するには、末梢性鎮咳薬が有用である可能性が指摘されているものの、末梢における咳嗽反射機構が十分に解明されていないのが現状である。現在までに想定されている咳のメカニズムは、多種多様で複雑である。最近、気道における咳の刺激情報を受容する感覚受容器として注目されているものに、機械的、化学的あるいは熱刺激など、多様式の刺激に反応するTRPV1 (transient receptor potential vanilloid 1) やTRPA1 (ankyrin transmembrane protein 1: ANKTM1) がある。また、電位依存性Na⁺チャネルのサブタイプであるテトロドトキシン抵抗性 (TTX-R) Na⁺チャネルのNav1.8が咳受容器の興奮性調節に関与するとの示唆もある。

そこで本シンポジウムでは、末梢における咳嗽反射機構におけるこれら受容体あるいはチャネルを中心とした咳の感受性調節に関するこれまでの知見を紹介し、慢性咳嗽の病態におけるこれら調節機構の変化およびこれらの役割から推測できる新たな治療薬の可能性についてレビューしたい。